

報告要旨

UBS によるクレディスイス買収を巡っては様々な検討がなされている。関連研究における論点はおよそ次の4つに整理できる。破綻の原因、危機の実態、スイスでの反応、合併後の展望である。

本報告では、これら4つのテーマについて、関連研究で深く検討されていない点を中心にスイスの視角にも着目しつつ述べる。

第1章では、破綻の原因について、相次ぐ不祥事、中東マネーへの依存、戦略の見直しを取り上げた。今回の破綻の原因について、直近の出来事に焦点を当てたものが多いが、そうした原因は以前から続いていることを明らかにした。

まず、クレディスイスが数々の不祥事を繰り返してきたことを年表から振り返り、その1つの理由に同行の企業体質があったことを指摘した。

ついで、クレディ・スイスは、およそ危機時に中東からのマネーを受け入れる中で依存を強めていった。結果として、2023年3月にそれら大株主が新たな出資を断ったことが破綻の1つの要因となった。

さらに、戦略の見直しの1つは、投資銀行部門からウェルスマネジメント部門に中心をシフトさせていくこと、いま1つは、ウェルスマネジメント部門のなかでもアジア地域を重視することであったが、いずれも不十分な結果に終わった。

第2章では、危機の局面について、そのきっかけ、およびクレディスイスの資金フローの2つの側面からアプローチした。

まず、2022年10月と、2023年3月の両危機は、総じて言えば、いずれも、クレディスイスの潜在的な弱さが高まっている中で、トリガーとなる出来事に誘発されて発生した。

次に、クレディ・スイスの資金フローを見たところ、同行のウェルスマネジメント部門から流出した資金は他国の銀行のみならず、国内の大銀行ないし中位行にも向かっていた。

第3章では、両行の合併を受けたスイスにおける主たる反応に注目した。その際、とくに、批判の声、買収プロセスの是非、および訴訟の3つの側面から述べた。

第4章では、新生UBS誕生後の展望を述べた。その際、クレディスイスから新生UBSへの引継ぎと、展望に際して現状見られる悲観論と楽観論に着目した。

引継ぎについては、UBSがクレディスイスから正の遺産を引き継ぎ負の遺産を引き継がないことがカギとなる。悲観論と楽観論については、各々の見通しの妥当性を判断を下すにはもう少し時間を要するが、カギとなる要素は、クレディスイス破綻のダメージをスイスの強みがどれくらい抑制できるかである。